

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：24402
 研究種目：基盤研究(c)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22510291
 研究課題名（和文）ジェンダーから見た第一次世界大戦の表象

研究課題名（英文） Representations of the First World War as Seen From a Gender Perspective

研究代表者

荒木 映子 (ARAKI EIKO)

大阪市立大学・大学院文学研究科・名誉教授

研究者番号：50151155

研究成果の概要（和文）：男は戦場へ、女は銃後を守る、というジェンダー規範が第一次世界大戦のイギリスにおいてどのようにくずれ、再編成されたかを研究した。過去の戦争の英雄像がもはやあてはまらない現実を知った兵士達は、「男らしさ」の喪失の問題に苦しむ。また、総力戦体制は、結果的に、女性達をも前線近くへ看護婦や救急車運転手として赴かせることになり、銃後＝女性というくくりをこわしてしまう。従来の規範が再編成される過程と、社会や国家によるその受入れ方を種々の戦争の表象によって検討し、新たな大戦の相貌をとらえようとした。

研究成果の概要（英文）：The aim of our research is to examine how the official gender script —men at the battlefield and women at the home front— was disrupted and recomposed in Britain during the First World War. When confronted with the reality that the old heroic ideals of war were no longer applicable, soldiers tended to suffer from a loss of manliness. On the other hand women who worked as nurses and ambulance drivers often crossed the borderline between the feminine and the masculine. We have investigated various representations of the war to see how traditional gender roles were reconstructed in wartime and accepted (or not accepted) by society and the nation at large.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー、ジェンダー

キーワード：身体・表現・メディア

第一次世界大戦、犠牲、記憶、トラウマ、戦場、モダニズム、記念碑

1. 研究開始当初の背景

初めての総力戦としてイギリスに大きな影響を与えた第一次世界大戦は、戦場に赴いた将兵が数々の体験記や詩を残しているのみならず、戦場を体験していない作家や詩人も戦争の与えた影響を間接的に作品に表現

している。研究代表者の荒木は、第一次世界大戦の戦争詩とモダニズム文学との研究から、マス・リヴィングとマス・デスという数の与えるショックが両者に共通することを指摘し、モダニズムと大戦とを関係づける著書を出版していた。また、文字文献だけでな

く、大戦時の写真やポスターについての政策的、文化的見地からの研究や、戦場ツアーについての思想史的、文化史的意味についても考察している。研究分担者の高橋は、Siegfried Sassoon の研究に始まり、下士官兵の手記や回顧録を精力的に読んできた。将校階級のエリート作家・詩人の作品に依拠して大戦の神話をつくりだした研究者達 (Paul Fussell, Eric Leed 等) と異なり、無名の個人の体験を重視する新しい歴史学者達 (Jay Winter, Antoine Prost 等) に倣って研究を進めてきた。

これらの研究にジェンダーの視点を導入すると、前線／銃後という二項対立が男／女に置き換えられるのではなく、その中間のグレー・ゾーンに位置する男性女性—VAD や WAAC に入り看護婦や救急車運転手として戦場近くに赴いた女性、傷病のために帰還した兵士、徴兵忌避者、安全な後方勤務に就いた男性等々が多く存在していたことがわかる。このジェンダー規範の変質が大戦の様々な表象 (文学、芸術、手記、写真、プロパガンダ、記念碑、追悼行事等々) にどのように表れているか、また男性性、女性性の実質的な再編成をもたらしたのかということ、比較文化的立場で研究しようと考えたのが本研究の動機である。

2. 研究の目的

前線に赴いた男性に替わって職に就いたり、前線近くで傷病兵の救護にあたりする女性達が増える一方で、男性達は戦場で精神的・肉体的に傷ついて非男性化していったことから、初期のフェミニスト研究者 (Sandra Gilbert, Elaine Showalter) は、女性と男性の勢力変換の図式をモダニズム文学やシェル・ショックの症例に実証しようとした。しかし、後の歴史家はこの見方を楽観的であるとして退け、女性の地位に実質的で意味のある変化はなかったという悲観主義に修正している。

この未だに決着のついていない、ジェンダーの境界線が引き直された否かの問題を考えるにあたって、大陸に渡って戦争貢献した女性達の手記、自伝を読み、その体験の実態を調べる (荒木)。注目されてこなかった下士官兵の手記、回顧録を読み、「男らしさ」の概念と「男同士の間」(comradeship) の特質を再検討する (高橋)。

また、上に挙げた、ジェンダーの分極化の変質の有無とは別に、大戦が表象される時に働くジェンダー化の仕組みを、戦中の種々のメディアや大戦後の記念行事や戦争記念碑等、個人の言説を超えた視座から検討する。

このように、旧来の男／女の分極化が、大戦によってどのように変質したのか、そして再編成されたのかを、個人の体験を基にした

言説と、社会や国家の構築する表象によって、明らかにするのが目的である。

3. 研究の方法

傷病兵の救護のために戦場に赴いた経験を描いた女性達の作品は、少数の例外 (Vera Brittain) を除いて、男性が書いた戦争文学と比べるとほとんど読まれてこなかった。発禁処分になったものもあり、フェミニスト系出版社が再版を出し始め、研究されるようになったのは、1980年代になってからである。再版されず、未だに入手困難のものもある。これらの文献を読み、ロンドンの戦争博物館等に所蔵されている女性達の手紙や日記を調査する。(荒木)

最近になって、主に将校階級の手による戦争文学のキャンオンだけでなく、従軍した兵士達の様々な声が出版されるようになってきている。これらの作品を読み、イギリス、フランス、ベルギーの博物館に所蔵されている兵士の手記や手紙を調査して、兵士の男性性が形成あるいは解体されていく過程を研究する。(高橋)

そうした個人の体験を超えたところで構築される記念行事、記念碑、墓地、博物館、戦場ツアー等の実態を調査するために、現地調査をする。

4. 研究成果

(1) 前線に近いところで、救護にあたった運転手や看護婦の手記を読むことによって、兵士と同じようなトラウマ体験を女性達もしていることがわかった。これまで、医療・看護従事者等の経験についてはほとんど研究されておらず、「戦時のもう一つのトラウマの歴史」が成立する可能性がでてきたと言える。また、Evadne Price, Ellen la Motte, Mary Borden 等の、苛酷な救護体験を綴る語り的手法は、省略、反復を多用し、皮肉と風刺に満ち、モンタージュを思わせる断片的で非連続的な構成を持っている。これらの手法はモダニストに通じることも明らかになった。

これまで第一次世界大戦の研究は、西欧中心、白人男性中心、西部戦線の将校階級中心に行われてきたと言ってよい。近年、植民地から召集された兵士や中国からのクーリーについての研究も始まり、民間人の被った苦痛が記憶喪失の状態にあることも指摘されるようになった。こうした批評の動向の中で、女性達の戦争貢献と被った被害についても研究する必要がある。

また、日本と大戦との関係については、政治史や軍事史において論じられても、日赤が欧州に派遣した救護看護婦のことは、ほとんど知られていないと言ってよい。たまたま、ロンドンとイープリの博物館で見つけたカ

ナダ軍日本人義勇兵の写真と西部戦線に派遣された日赤看護婦の写真から、日本人と第一次世界大戦との思いがけないかかわりが明らかになったのは、大きな収穫であった。連合国の看護婦と同じように、前線から運ばれてきた傷病兵の看護にあたった日赤の看護婦は、手記を残していないので、実体験についての生の声を知ることはできないが、日赤の所蔵している史料によって、当時の女性の役割観念が浮かび上がり、欧米の女性の体験と比較検討することができた。日赤救護班については、ほとんど忘れられた重要な日本史の事件であり、本格的に歴史学、比較文化、ジェンダー、国際法、人道支援等々の視点から本格的に学術的研究がなされるべき問題である。この端緒を開くことになったのではないかと、自負している。この発見とともに、女性の戦時の社会的役割について、日本と西欧との比較研究をさらに進める可能性が認められる。(荒木)

(2) 下士官兵たちの手記を調査することで、兵士が尊重した「男らしさ」には、「能動的行為」と「受動的行為」の二つの側面があることがわかった。能動的行為は、ベルギーを救うという大義のために兵役に志願するというものから、戦場で、仲間を救うために命を危険に晒すというものへと推移していき、崇高な自己犠牲として、今日まで広く賛美されている。一方、受動的行為とは、戦場という極限状態から逃げ出すことなく耐え続けることである。このような行為は、従来の男らしさの概念とは大きく異なり、その価値を「その場に居なかった者」に理解させることが困難であったため、男らしさの喪失とみなされるようになったと言える。

また、戦時の性役割が規定される際、男/女という二項対立に属さない「非男性」というカテゴリーが構築されたことを明らかにした。このカテゴリーに入るのは、兵役に就かなかった男達である。当初、彼らは、男らしさが欠如しているとして女達から揶揄され、辱めを受けたが、徴兵制度が導入された後、彼らは良心的兵役拒否者となり、過酷な環境に置かれ、数々の苦難を味わった。しかし己の信ずる大義のために、能動的に兵役を拒み続ける彼らは、理想的兵士像に近い存在となった。彼らの中では、兵役を拒むことこそが男らしさの証であるという論調が優勢になり、遂には戦後、従来の男らしさの規範を体現した者であると認められるようになった。

このような観点に立てば、大戦を通して、男らしさの規範が二分化したと捉えることができる。従来の規範が戦後も生き延びた一方で、受動的行為による男らしさの規範が新たに形成されたと考えることにより、大戦文

学のキャンノンを、新たな視点で読み直すことが可能になる。(高橋)

(3) 男性性、女性性の規範が大戦中に再構築されていった一方で、戦後、社会や国家が戦争を記念する時には、男性の英雄像によって表象されることが多い。伝統に回帰していく傾向に逆らう動きがあるのかどうか、さらに精査する必要がある。また、女性による戦争貢献や犠牲は、記念碑、文学作品、絵画等に表象されることが少ないばかりか、あまり知られていなかったり、社会的な補償の面でも不利益を被っていたりする。名前を残さなかった兵士や女性達の声をすくいあげ、第一次世界大戦の、光を当てられていなかった面に着目したことは、大いに意義があった。今後は、イギリス以外の地域にも対象を広げ、より多様な表象について研究を進める予定である。高橋は、兵士だけでなく兵役に就かなかった男性の手記も研究し、男性性の概念の変容と大戦の犠牲者像の諸相について、博士学位請求論文をこの五月にまとめることができた。荒木は、科研費による三年間の研究・調査を踏まえて、ジェンダーを軸に大戦の文化史を再考した本を出版する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① 荒木映子、「第二の戦場」のモダニズム、神戸女学院大学論集、査読無、第 60 巻第 1 号、2013、pp. 1-20
- ② 荒木映子、欧州に派遣された「女の軍人さん」—日赤救護班と第一次世界大戦、人文研究、査読有、第 64 巻、2013、pp. 5-35
- ③ 荒木映子、Not So Quiet on the Western Front…—The Other War Writing and Women “Out There”、人文研究、査読有、第 63 巻、2012、pp. 51-68、http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/user_contents/kiyo/DBd0630005.pdf
- ④ 高橋章夫、戦争の「最初の犠牲者」—第一次世界大戦時のドイツ軍の残虐行為に関するイギリスのプロパガンダー、文学・芸術・文化、査読無、第 23 巻第 2 号、2012、pp. 125-154、<http://kurepo.clib.kindai.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=AN1018193X-20120330-0182>
- ⑤ 高橋章夫、自己犠牲の力—第一次世界大戦下のイギリスにおける良心的兵役拒否者、人文学論叢、査読無、第 13 号、2011、

pp. 73-85

- ⑥ 高橋章夫、シーグフリード・サスンと二度の世界大戦—記憶から虚構へ—、文学・芸術・文化、査読無、第22巻第2号、2011、pp. 241-256、
<http://kurepo.clib.kindai.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=AN1018193X-20110330-0256>
- ⑦ 高橋章夫、「白い羽根の女性」がもたらした社会的影響、人文学論叢、査読無、第12号、2010、pp. 79-90

〔学会発表〕(計3件)

- ① 荒木映子、苦痛を目撃することのトラウマ—第一次世界大戦の脇役たち、日本英文学会関西支部、2012年12月22日、京都大学文学部新館
- ② 荒木映子、「パブリック・モニュメント」から「パブリック・アート」へ、大阪市立大学表現文化学会、2011年12月3日、大阪市立大学田中記念館
- ③ 高橋章夫、能動的殺人者としての兵士像—*Her Privates We*における兵士の自由、日本英文学会関西支部、2010年12月18日、大阪市立大学8号館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒木 映子 (ARAKI EIKO)
大阪市立大学・大学院文学研究科・名誉教授
研究者番号：50151155

(2) 研究分担者

高橋 章夫 (TAKAHASHI AKIO)
大阪市立大学・大学院文学研究科・非常勤講師
研究者番号：10527724

(3) 連携研究者

なし